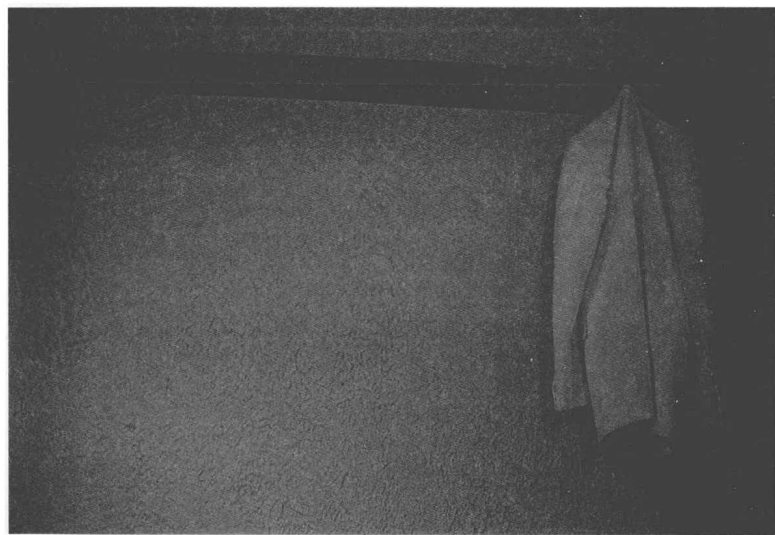


詩人の旅

田村隆一



詩人の旅
田村隆二



詩人の旅

昭和五十六年十月八日 第二刷発行

著 者 田村隆一

発行者 江口克彦

発行所 PHP 研究所

京都市南区西九条北ノ内町一一 郵便番号六〇一

電話 〇七五―六八一―四四三一

東京事務所 〇三―二九五―九二二一

印刷所

大日本印刷株式会社

製本所

© 1981 Ryuchi Tamura Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えさせていただきます。

詩人の旅／目次

奥 津	鹿 児 島	伊 那	越 前	若 狭	隱 岐
118	93	—— 飯田・川路温泉	—— 越前町・三国町	—— 小浜	7
		69	53	29	

越 後
—
新潟
135

佐 久
—
小海線
150

東 京
—
浅草
173

京 都
193

沖 縄
199

ぼくのひとり旅論
206

詩
人
の
旅

隠岐

メイ・ストーム、五月初旬に日本列島を襲う、あの爽やかな低気圧が東方洋上に去るのを待ちかねて、ぼくは特急「出雲」にとび乗った。東京発午後六時二十分。寝台車に乗るのも、じつにひさしぶりである。ぼくのベッドはてっぺんで、その下には、マリリン・モンローのような女性がやすむのではないかと、なかば期待していたが、松江に帰るといふ、人のよさそうな初老のおじさん。東京にあそびにきたら、雨と風ばかりで、ひどい目にあいまして。と、ボーイがベッドをつくっているあいだ、ぼくにボソボソ語る。メイ・ストームは去ったが、車窓から眺められる京浜の空は、どんよりと雨雲が重い。ぼくは天井にちかいベッドによじのぼると、ひっくりかえって「島の旅」という旅のガイド・ブックに目をおした。「利尻・礼文から与論島までロマンあふれる島への招待」というサブ・

タイトルがついている。ぼくの行先は日本海の隠岐である。日本海を見るのもじつに久しい。二十八年ぶりである。十年まえに金沢へ行ったとき、チラッと見たが、あれは見たうちに入らない。昭和二十年の七月と八月の夏を、ぼくは若狭湾ですごした。海軍の陸戦隊にいて、午前中は山をあるいては陣地探し、午後は美しい日本海で泳いでばかりいた。米軍の艦載機がチームをつくっては、海上をたえず旋回しているので、日本の漁船は一隻も見あたらない。砂浜にも人影はなく、ぼくは松林のなかで寝そべりながら、紺碧の海と空をぼんやりと眺めていたのだ。以来、日本海を見ていない。だから、「日本海」という言葉だけを聞いてだけで、ぼくは、ぼくの青春と日本の終末を同時に追体験するのである。

では、「隠岐」はどこにあるのか？ ガイド・ブックは語る――

「島根半島の北方44〜80キロの日本海上に浮かぶ文字通りの『沖ノ島』で、島後と、島前の西ノ島、中ノ島、知夫里島の四つの大きな島と一八〇余の小島からなる群島で、隠岐という名の島は存在しない。島前、島後とは、本土に近い方が前、遠い方が後ということとは容易にわかるが、島を下ウと読ませるのに抵抗を感じる。古文書によると十五世紀末頃までは道前・道後と書かれていたものが、十六世紀に入るとそれが島前・島後となり読みだけがそのまま伝えられたのである」

なるほど、「隠岐」という島は存在しないのか。「存在しない島」へこれから行こうとい

うのだから、きわめて詩的である。ガイド・ブックをバラバラめくっているうちに、沼津をすぎた。九時ちかくなつたので、天井棧敷からおりて食堂車にむかう。もう、この時間になるとがらあきで、車窓の夜景をさかになにウイスキーを飲みはじめ。十時半が看板だというから、ウイスキーを飲むのには手ごろな時間である。酔いがまわってくるにつれて、車窓から飛び去って行く、この東海道の夜景が一種異様なものに見えてくる。まさに光の洪水なのだが、それは民家の生活の灯ではなくて、大工場のイルミネーションと、その大工場を縫って疾走する自動車の赤いテール・ランプなのだ。まるで、近代的な大工場の構内を、列車が走っているといつても過言ではない。極東の小さな島の太平洋岸は、一本の工場ベルトと化して、ひたすらGNPの数値を目指して光をばらまいているのだ。ぼくは反射的に五年まえに通過したアメリカ大陸横断鉄道の車窓から見た夜景を思い出した。満天の星と黒い大地。ときおり一群の光に出会ったが、それはまぎれもなく生活の光であり、コミュニティの光であった。だが、この東海道には、巨大な工場の光のイルミネーションにさえぎられて、人間の生活の光は見えない。蒲郡あたりで、食堂車は閉店、ぼくは旅愁なき旅愁と別れをつけて、ふたたび天井棧敷にはいあがる。

＊

夜明け、すでに鳥取を過ぎて、大山だいせんの姿がはるかに見えてくる。快晴。夜中に京都を通過して、山陰道に入ったら、低気圧の名残りの雲がぎれたのだ。自分の「オテンキ男」ぶりに、われながら驚く。天気予報では、二、三日、日本列島はぐずぐずと言っていたのに。これまでにいろいろと旅行したが、雨や風にあつたためしがない。外国旅行も二度ばかり経験したが、その都度、天気晴朗なのである。旅行で快晴にめぐまれたかつたら、ぼくを連れて行くといい。洗顔して、喫煙室で煙草を吸っていたら、六十歳ぐらいの紳士がやってきて、話しかける。

「どちらまで」

「米子でおりののですが、そこから隠岐へわたります」

「それはなによりで。わたしも何度か行つたが美しい島ですよ。船がちよつとゆれますがね。ま、沖に白波が立っていないようだから、港を出て、岬の鼻をまがつたあたりでゆれるくらいでしょう。ああ、帰りは飛行機で、それは結構、正味十五分も乗れば米子についてしまいますからな、ただ、島後の空港は離陸距離が短いから、失速でもすると、海にそのまま突っこんでしまいますな」

「事故はよくあるんですか」

「いいや、ただのいっぺんも」

紳士の襟もとのマークを見ると、菊がついている。市会議員か県会さんなのかもしれない。

「ほら、あの煙突、あれが日本バルブの煙突でね、あれと大山が、ま、米子のシンボルですよ」

ぼくは礼を言つて、あわてて自分の寝台にもどると、小さな黄色いオンボロ・バッグをもつて、列車からとびおりた。午前七時四分。隠岐行の船が出る境港行の電車が出るまで、三十分ほどあるので、米子の駅の構内をブラブラする。立ち喰いの米子そばがあったので、一杯。百円。美味。ローカル線特有の、のんびりした電車がホームに入ってきたので、そいつに乗りこむ。通勤通学電車で、またたくまに、高校生でいっぱいになる。小さな駅を五つばかり通過して、終点「境港」。いかにも江戸時代からの港町らしく、おちついた雰囲気。駅から十分ばかりブラブラ歩いて行くと、汽船の乗場があつて、そこでコーヒ一杯。二人のウェイトレスはいずれも美人。山陰は美人が多いと聞いていたが、ほんとうだ。出雲の神さまの子孫のせいかな。たしか司葉子も、この地方の名家の出身と聞いている。さいさきよし。時間がきたので、船に乗りこむ。隠岐汽船の「しまじ丸」(九六一トン)、白い船体のスマートな船。四人部屋の特一等というのをはずんだが、相客は、新建材とアルミサッシを島に売りこみに行くという青年ひとり。午前九時、定刻にドラがな

り、どういふわけか、船出の音楽に、予科練の歌をやりはじめる。「若い血潮の予科練の……」という、あれである。面喰うこと、はなはだしい。青年の会社は米子で、島には月に一度商売に行くというので、米子の景気や島の模様を聞く。窓から青い海と大山がくつきりと見え、沖合に出たところから、ゆれてくる。そのゆれも、まことに快適で、おなが減って、しかも同時にねむくなるというゆれ。青年がかかるいいびきをかき出したので、ぼくもねむってしまう。小一時間、あるいはもつとか、眼がさめて船窓から外をのぞくと、海ばかり。甲板に出ると、陽は頭上。大山ははるか彼方にかすみ、前方に緑の島影が見えてくる。島、ぼくの肉眼にはあくまでも美しい緑の島々なのだが、愛用のガイド・ブックは、つぎのようにささやく――

「日本内地の火山より古い第3紀にできた火山島で、その系統も隠岐――竹島――鬱陵島と、大陸系の白頭火山につながり、何回となく噴出した溶岩が重なりあう複雑な構造。海岸の80パーセントは断崖でそれがまた日本海の激浪を受けて浸食され、バラエティーに富んだ風景美をつくりだしている。」

そして、発掘された土器から推定すると、ぼくらの先祖がこの島で生活しはじめたのは、なんと縄文初期四千年以前。そして八世紀初頭、聖武天皇の神亀元年（七二四）に、緑の島々は遠流の地と定められ、万葉の大詩人柿本人麿の子躬都良麿が流人第一号、以下

時代別に貴人の名前を列举する——藤原刷雄、船親王、藤原朝臣田麿、深草王、酒井常小勝、小野篁、伴健岑、伴宿禰中庸、源義親、佐々木広綱、橘兼仲、文覚上人、左中将備中権守源雅清。天皇では、むろん、後鳥羽院、後醍醐天皇。徳川期では、ブレイ・ボーイの飛鳥井少将雅賢、日御碕檢校尊俊など（『隠岐の流人』・横山弥四郎著）。むつかしい名前ばかりで、舌をかみそうだ。流人の島といつても、これじゃまるで日本文化の粋の輸入国ではないか。この貴人たちがばらまいた子種が、千年以上にわたって培養され、温存されてきたのだから、島には美人がウジャウジャしていること間違いなし。おお ロマンの花よ咲け！ まさか大声で叫ぶわけにいかないから、胸のなかで、ソツとつぶやいた。

＊

島、西の島、島前の三つの島のなかで一番大きな島に、正午、到着。ちょうど三時間。手前の知夫里島によつて、（といつても港がないから、伝馬船にエンジンをつけたような海上トラックが、島とわが「しまじ丸」のなかをとりもつて、お客と郵便物などをおろしたり、あげたりする）西ノ島の最大のハーバー、浦郷（うらごう）に上陸。旅館の番頭さんやタクシーの運転手さんが、ぼくらを待ちかまえている。客が百人ほど降りた。団体さんがかなりいる。波止場には、漁業組合の大きな倉庫があつて、その近くに漁船が何隻もやってあ

る。イカと鯛が、かれらの獲物なのだ。ぼくはブラブラ歩くことにする。とにかく、昼めしを食わなくちゃ。お土産物屋、都会風喫茶店、食堂がならんでいる。「みなと食堂」ときたぞ。ぼくは西伊豆の小さな漁港を思い出した。しかし、ひもの匂いはいつこうにしない。風はさわやか。まるで五月のワイキキの裏どおりみたいだ。海の男（水夫や漁師）たちがあちこちにたむろして、白い歯をむきだして談笑している。青年はハンサム。すぐ町のメイン・ストリートに出る。だって町役場があつて、郵便局があつて、床屋があるもの。どこでお昼をとろうか？ こんなことを考えながら、見知らぬ小さな町を歩いているのがいちばんうれしい。食堂が何軒もあるが、ひっそりしている。サカナはうまいにきまっている。おつと警察だ。ぼくはお巡りさんにどこがいいか、相談してみた。だって、警察の入口に大きなポスターがあつて、それには、「密入国者を発見したら至急届けてください！ 見知らぬ人、挙動不審の人には特に注意！」とあるんだもの。「さあてね、どこだつておなじようなもんだけど、そうだ、つい十日ばかりまえに寿司屋が開店したから、行ってごらんさいよ」

警察から五〇〇メートルほどひつかえして、メイン・ストリートのはずれにいくと、村のデパートのとなりに、新しいのれん。主人は二十五、六の青年。鯛、イカ、アワビ、アカガイ、エビ、それにお酒二本。ノリ巻。それで千円。アカガイとエビさえ食べなけり